



© Yuki Nakase

コーチ1941春夏コレクション2017のランウェイ

大好きなファッションウィーク

1日が48時間あったらもう少し楽なのに、と考えてしまう忙しさが今年はいばらく続いています。仕事も知り合いも縁故もゼロからアメリカでの生活を始めたので、それから考えると忙しいことこそが生きてる証のように感じます。与えられる時間が倍になったら、受けることのできる(やりたい)仕事量も倍になるだろうから、時間が足りないという状況は何があってもあまり変わらないのでしょうか。この記事はニューヨーク・ファッションウィーク春夏コレクション2017の終盤、コーチの現場で書いています。8月15日に図面製作を始め、9月4日に仕込みが開始し、今日9月13日が本番です。アソシエイト照明デザイナーとして照明家のジャン・クルーザさんのお手伝いをさせていただいて今回で4シーズン目となり、ラルフローレンやトミーヒルフィガーと並び、コーチに関わらせていただいて今年で4回目となりました。

2015年の冬に初めて参加したコーチ秋冬コレクション2015のときは、図面を書いてほしいというだけで雇われました。憧れのファッションショーの初仕事だったので、私としては現場でも働かせていただきたい一心でしたが、彼は常日頃からアシスタントをあまり現場に呼ばないそうです。特にヨーロッパのファッションショーに出向くときは、アメリカからアシスタントを連れて行かないほうが、現場の照明オペレータ達と良い関係が築けるうえ綱渡りのようなスリルが好きだと、彼は話していました。あれから2年が経ち、自分の不出来に対する反省の数は徐々に少なくなってきましたが、毎回違った課題が私を待ち構えていて、この仕事に飽きることはありません。

照明チーフのエイミー・シグマンさんは私より5歳ほど年下のとても可愛い女の子ですが、ユニオンの照明オペレータたちを率いる、コーチの現場になく

てはならない力強い存在です。2015年秋からお互いに助け合ってきた彼女とは数々の連絡行き違いや情報不足などを一緒に乗り越え、照明チームを守りつつクルーザさんとコーチの要求に最大限応えることを可能にするよう、お互いに協力しあって用意周到を徹底しています。毎度、最大の挑戦は「Change(チェンジ)」です。装置のチェンジ、器材のチェンジ、「気が変わった」というチェンジなど、例を挙げるときがありません。たとえば、先述のコーチ秋冬2015の仕事は図面製作だけのはずが、結局現場にも立ち会うことになったのもチェンジがもたらした結果でした。というのも、本番の36時間前にデザインのコンセプトが180度「チェンジ」しました。図面どおりにすでに仕込まれていた約半分の照明器材を急いで仕込み直して、プロの基準で翌日朝9時の本番に間に合わせる必要があったため、急遽現場にも来て欲しいとの連絡をいただいたのです。あのときほどチェンジを好意的に感じたことはありません、というのは半分冗談ですが、現場でのチェンジを前向きに受け止めて可能な限り対応することと、チェンジが起こり得る状況を先読みして備えておくことを学びました。

さて、この最終段落はコーチの本番後に向かったラルフローレンのファークラスと明かり合わせの合間に書いています。もうすぐニューヨークが夜明けを迎えます。睡眠時間の確保も実力のうちとは言えども、この仕事ばかりは拘束時間の管理が自身のコントロール外にあることが多く、体調管理がキャリアアップの鍵を握りますね。とにかく、今シーズンもとても充実したファッションウィークでした。また来年2月も呼んでもらえますように！